日本語教育通信

http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/

発行・編集　国際交流基金 日本語グループ
編集協力　国際文化交流推進協会

第56号

2006年9月発行　ISSN 1343-2524

JAPANFOUNDATION

CONTENTS

■ 表紙・特集 …… 1
日本語新表現の合理性
明海大学教授　井上史雄

■ 日本語の教え方イロハ　第2回 …… 4
読解

■ 授業のヒント …… 6
やる気を引き出す授業のテクニック

■ 新聞・雑誌から見る現代日本　第24回 …… 8
親心　食の安心

■ 本ばこ（新刊教材・図書紹介） …… 11

■ 文法を楽しく!!　第6回 …… 14
「～て～」(1)

■ KC（関西国際センター）研修生のNipponリポート 第6回 …… 16
公共図書館のサービス

※本誌で、ルビが文字の下に付いているのは、紙や物差しなどでルビを隠して、漢字の読みの練習ができるようにするためです。

On the Web

以下の記事はJFのウェブサイトのみにてご覧になれます。

■ 日本語・日本語教育を研究する 第30回
日本語の終助詞について考えるために大切なこと
神戸学院大学人文学部教授　野田春美

■ 授業に役立つホームページ 第15回
練習問題を作ろう

■ 海外日本語教育レポート 第13回
オーストラリアの学校教育過程における日本語教育
NSW州教育訓練省日本語コンサルタント　サリー・シマダ

■ にほんごハローワーク 第6回
語学の上達のためには目的をもつこと
フレディ・アルミホスさん
ミヤリサン製薬株式会社（出身：エクアドル共和国）

海外の読者の皆さまへ

54、55号に同封した**継続送付に関するアンケート**は12月31日で締切ります。ご回答がない場合は、**送付を停止**します。アンケートはウェブサイトからも入手できます。

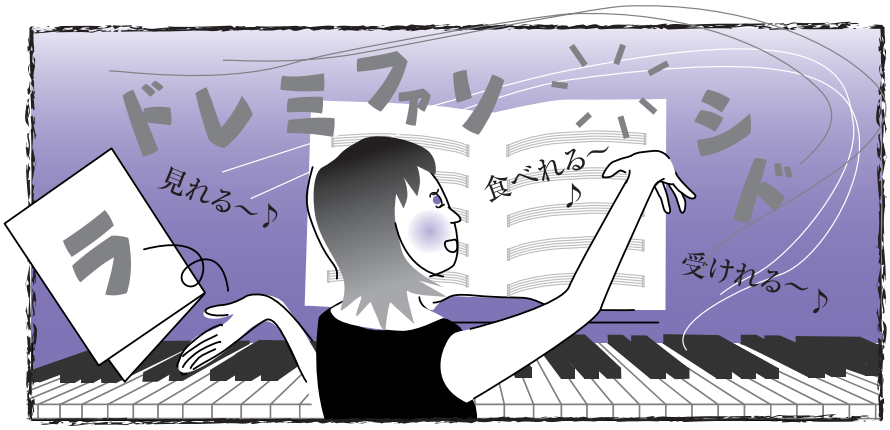
Caution

http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/index.html

『日本語教育通信』　第56号

2006年9月発行

編集・発行　国際交流基金
日本語事業部企画調整課
〒107-6021　東京都港区赤坂1－12－32
アーク森ビル21F
TEL. 81-3-5562-3525　FAX. 81-3-5562-3498
E－Mail jfnckt @ jpf.go.jp
編集協力
財団法人 国際文化交流推進協会



日本語教育通信には、海外で日本語教育に携わる皆さんから「最近の日本語について知りたい」という声が多く寄せられています。そこで、今号の表紙特集では日本語の変化や最近の表現が広がる理由や、それらをどう捉えることができるか、明海大学の井上史雄先生に書いていただきました。

日本語新表現の合理性

明海大学教授　井上史雄

言語教育と言語変化

ことばを学ぶ立場からいうと、二つ以上の言い方があるのは、むだに思える。どちらか一方に定まれば、覚えるほうも(教えるほうも)楽だ。たとえば日本語教育で、初歩の1000語を覚えるときに、「あす」と「あした」のような同じ意味の二つの言い方があると、1語増えるのと同じことになる。だから教師から、一つの標準を決めてほしいという声が上がることがある。

ところが、二つ以上あるときに、よく調べてみると、一方が古くから使われていて、もう一方が新しく出た言い方であることが多い。これは日本語が変化する途中の段階だ。そして新しいほうの言い方には、広がるだけの合理的理由がみつかる。けれども合理的だからといってすぐに使っていいわけではない。現在どちらが多く使われているかを確かめる必要がある。いくつかの現象については、文化庁で国民の使用状況を調査しているし(注1)、インターネットの検索ソフトGoogleなどで実際の使い方が分かる。この方法なら海外に住んでいても国内と同じように確かめられる。

以上は、ことばの「ゆれ」といわれる現象が実はことばの変化の一部であることを示している。その目で見ると、最近の若い人の日本語には、「ゆ

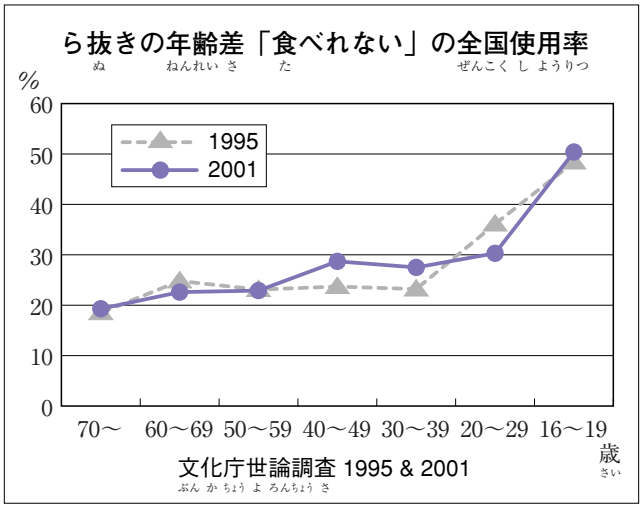
れ」がもっとたくさん見られる。その多くは、日本語の単純化と結びつくから、外国人の日本語学習者にとって、覚えやすくなるともいえる。いくつかの例をあげよう。

日本語単純化の動き

20世紀後半までは、ガ行の発音を単語の中では鼻にかけて「**ガ行鼻濁音**」で発音するのが標準的とされた。「午後」というときの二つのゴの発音は違っていた。数百年前に日本語で発音の変化があったためにこの「ガ行鼻濁音」ができたが、この発音のおかげで複雑さは増したものの、コミュニケーションが効率的になったとは言えない。アナウンサーになるためには、この発音の訓練が必要だった。日本語教育でも、鼻をつまんだりして、苦労して教えた。しかし今の若い人はこの鼻濁音を持たない。日本語教育でもうるさく言わなくなったので、初歩の授業が少し楽になったわけだ。

文法については、色々な現象で単純化がみられるが、代表的なものをあげよう。

まず最近は「**ら抜きことば**」の進出が目立つ。「見れる」「食べれる」「受けれる」などで、若い人の間ではよく使われる。本来は「見られる」「食べられる」「受けられる」である。実は現代日本語では、可能を示すのに「走れる」「行ける」と言っているが、江戸時代、明治時代ころまでは「走られる」「行かれる」と言っていた。つまり受身も可能も尊敬も、形の上で区別がつかなかったのだ。ここ数百年かけて可能の言い方を受身や尊敬と区別する変化が進んでいる。「ら抜きことば」はその変化がちょうど半分ほどにさしかかっている段階だ。もう何百年か経つと、この変化が行き着いて、日本語の動詞の可能の言い方がすべて例外なく「ら抜き」になって、使いやすくなるはずである（注2）。外国人の日本語学習は、楽になる。しかし日本語教科書で「ら抜きことば」を教えるにはまだ早い。



逆に長くなる言い方もある。「**さ入れことば**」と言われるもので、「歌わ**さ**せていただきます」などの言い方だ。正しくは「歌わせていただきます」というべきだ。しかし「司会をつとめさせていただきます」のように「させていただく」という言い方が最近広がったために、色々な動詞に「させていただく」を付ける傾向が目立つ。今はインターネットで国会の会議録も見られるので、検索してみると、議員の発言では戦後まもなくからの用例がある。長いあいだかけて、少しずつ広がったわけだ。これも将来広がれば、すべての動詞に「させていただく」を付ければいいことになるので、単純になり、覚えるのが楽になる。もっとも「話す」のように「す」で終わる動詞だと、「話ささせていただきます」になって、さ行の発音が続きすぎる。何百年後かの変化の最後になるだろう。この「さ入れことば」も日本語教科書では教えない。

「違っていた」を「**ちがかった**」というのは、若者の間に広がっている。さらに「ちがくない」「ちがくなった」「ちがくて」も出た。インターネットで探ると「違いぜ」「違いぞ」などの言い方も出てくる。「違うぜ」「違うぞ」にあたる言い回しだ。英語のdifferentという形容詞にあたることばを、日本語では「違う」という動詞で表していたが、今の若い人は「ちがい」「ちがかった」「ちがくない」という形容詞にしたわけだ。欧米人にとっては使いやすくなるわけだ。これは文章ではほとんど見ないので、日本語教科書に出ないのは当然だ。

そういえば「**全然**」の使い方も単純になった。少し前までは否定の「ない」と結びついて使われた。「全然よく**ない**よ」のように。しかし似た意味の「全然だめだよ」を、文法的に「ない」と結びつかないのに、許した。次の世代は「ない」との結びつきが必要だとは考えずに、「全然いいよ」も使うようになった。単

なる強めの言い方になり、使用制限がなくなったわけだから、幼い人にも、外国人にも使いやすい。しかしこの使い方も、ふつうは日本語教科書に出ない。

単純化＋明晰化＝合理化

言語変化は、以上のように単純化に向かうだけではない。明晰化に向かう流れもある。二つ以上の言い方の違いがはっきりするような変化だ。「ら抜きことば」でいうと、可能の言い方を受身や尊敬と区別する変化と見れば、明晰化の典型といえる。「鳥たち」「花たち」のように、人間以外にも「**たち**」を付けて複数を示す動きも、明晰化だ。単純化と明晰化の両方をまとめて「合理化」といえる。日本人にも、日本語学習者にも、ことばが、使いやすくなり、覚えやすくなるわけだ。

日本語の難易度低下

ほかにも現代日本語では様々な点で変化が進んでおり、その大部分は合理化で説明できる。別の言い方を使うと「難易度が低くなった」と言える。日本の高校や大学では、試験の成績で入りやすさが違うので、「難易度」と呼んで、数字で示すこともある。言語についてもこの考えは適用できる。複雑で覚えることが多い言語は難易度が高い、少なければ難易度は低い。世界の諸言語とくらべると日本語は、発音は難易度が低く、文法は中くらいと見られるが、文字がやっかいだし、敬語もむずかしい。このおかげで難易度が高くなる。その日本語が、今単純化によって、あちこちで難易度を下げて、ほんの少し学びやすくなった。

誤用拡大の法則

多くの言語変化は、ここ数十年、数百年続いてきたもので、変わる合理的理由がちゃんとある。だから今後も広がり続けるだろう。世の中で誤用と騒がれる現象は、どうせ広がる。はじめは使用者が少なく、「言いまちがい」と軽視される。使用者が25%くらいに増えると、「誤用」として騒がれる。50%前後になると「ゆれ」と扱われる。75%ほどに増えると「慣用」として認められ、100%近くになればりっぱな「正用」である。

使用率が増えるにつれて、使われる場面も広がる。若い人が仲間内の話しことばで使うだけだったことばが、成人にも使われるようになり、テレビなどの公の場面にも登場し、広告の文章や、書きことばにもあらわれるようになる。つまり俗語から普通の単語へと、文体も上昇するわけだ。

この動きは「**誤用拡大の法則**」といってよい。この反対が「**流行語衰退の法則**」である。「今流行っている」という意識を伴って広がることばは、まもなく使われなくなる。

教科書と言語変化

外国人向けの教科書は、どの言語でも常に古風である。「ゆれ」の段階の新しい言い方を、初歩の教科書で教えるのは早すぎる。学習者は、その国に行けば、またテレビなどを通じて、ほうっておいても若者の言い方を身につける。合理的だから、採用しやすいのだ。

必要なのは、新しい言い方に接したときに意味が理解できることである。使いかたの練習は必要ないが、指摘だけはあるほうが親切だ。教科書で出てきた言い方との違いに気づかせること、そして改まった場面では、本来の言い方を使えるようにすることが、重要だ。

というわけで、初歩の教科書では、実際には単純化してたった一つの言い方を教えることが多い。しかし現実のことばはいつも変化している。多くは何百年にわたる変化で、しかも合理的な理由がある。二つ以上の言い方があるときに、違いや理由まで覚えるとさらに記憶の負担が増えるから、初歩の学習者には無理だ。しかし、教える側は、勉強して背景を知っておく必要がある。つらいが、人生そのものが勉強の連続なのだから、しかたがない。

井上 史雄

明海大学外国語学部（日本語学科）教授。NHK放送用語委員。東京大学文学部助手、北海道大学文学部助教授、東京外国語大学助教授・教授を経て現職。専門は社会言語学・方言学。研究テーマとしては、現代の「新方言」、方言イメージ、言語の市場価値などがある。著書多数。

[注 1]
http://www.bunka.go.jp/1kokugo/frame.asp{0fl=list&id=1000001687&clc=1000000073{9.html

[注 2]
井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書

第２回

日本語の教え方 イロハ

読　解

日本語国際センター専任講師　木谷直之

海外で活躍している日本語教師のみなさんから、よく「日本語教授法を知りたい」「すぐに使える授業活動を提供してもらいたい」という要望をいただきます。「日本語の教え方　イロハ」のコーナーでは、日本語国際センターの専任講師が、日本語の教え方を学んだことのない方に、「コースデザイン」や「読解」「会話」「聴解」「評価」などの基本的な教授理論、教授知識をわかりやすく解説します。既に日本語を教えている方も日本語教授法に関する基礎固め、知識の再点検にお役立てください。

はじめに

私たちは毎日、いろいろなものをいろいろな目的を持って、いろいろな読み方で読んでいます。例えば、新聞や雑誌を読むときは「タイトルや見出しを見て、読みたい記事を探して読む」ことがあるでしょう。小説や物語を読むときは「次に何が起こるか予測しながら読む」「文脈から言葉の意味を推測しながら読む」ということもします。論文やレポートのような専門的な文章を読むときは「キーワードを探しながら読む」「難しい専門用語を辞書で調べながら読む」「一文ずつ正確に母語に訳しながら読む」「理解を確認するためにくり返し読む」という読み方をします。詩を読むときは「声に出して読んで、音のイメージを楽しみながら読む」という読み方もあるでしょう。

「読む」ことを教える目的は、学習者が日本語でいろいろな読み方ができるようになることです。そのために教師は、授業中、どんな「読み」の練習や活動をすればいいのでしょうか。今回は、まず、私たちがどのように読んでいるか（「読み」のモデル）をふり返り、次に、学習者にどんな読み方ができるようになってほしいか（「読み」のストラテジー）を整理し、最後に、どのように「読み」の授業を計画すればいいかを考えてみましょう。

「読み」のモデルとスキーマ

「読み」の過程について、３つのモデルが考えられています。**ボトムアップモデル**、**トップダウンモデル**、そして**相互交流モデル**です。ボトムアップモデルは、文字や語彙のような小さな単位から文や段落という大きな単位へと解読を進めていく「読み」のモデルです。トップダウンモデルは、最初に読む目的や予測があって、文章を読みながら、目的に合うものを探したり予測が正しいかどうかを確認したりしながら読み進めていく「読み」のモデルです。相互交流モデルは、「読む」ことをボトムアップかトップダウンかというような、一方的な過程と考えず、必要に応じて２つのモデルを交互に使い分けたり組み合わせたりすることによって「読み」の過程が作られるという考え方です。

これらのモデルを学習者のレベルに当てはめて考えてみましょう。初級レベルでは、文字や基本的な語彙・文型を正確に覚え、それらを自動的に使えるようになるための練習のくり返しが中心ですから、「読み」の練習も限られた語彙・文型の知識をもとに丁寧に読み進んでいくボトムアップモデルの読みが中心になります。しかし初級後半、中級と進むにつれ、ある程度の長さのまとまった文章を読む練習が重要になると、ボトムアップモデルだけではなく、トップダウンモデルや相互交流モデルの読みをうまく組み合わせることが必要になります。

トップダウンモデルや相互交流モデルの読みでは、読み手がテキストの内容を「予測」したり「推測」したりすることが非常に重要なはたらきをします。私たちはこの「予測」や「推測」をどのように行っているのでしょうか。

何かを読むとき私たちは、自分が持っているいろいろな背景知識（**スキーマ**）、すなわち、文字や語彙、表現、文型などの言語知識や、テキストの内容や構造についての情報や知識、体験などを、読んでいる内容に関連づけて意味を理解しています。そして、新しく入ってきた情報が自分のスキーマと違う内容を含んでいれば、スキーマは再構成され、「新しいスキーマ」に作り直されます。ですから授業でも、学習者のスキーマを活性化し「読み」の活動に結び付けていくことが大切になります。

スキーマは短時間にまとめて導入すればいいというものではありません。初級段階から基本的な練習や活動の中で、場面や話題を適切に調整することによって、日本人の生活や習慣、日本の文化や現代事情などの情報や知識を少しずつ導入して、学習者のスキーマを豊かにしていくことが必要です。

「読み」のストラテジー

私たちは毎日の生活の中で自分が持っているスキーマを活用

して、目的に応じてトップダウンモデルの読みをしたりボトムアップモデルの読みをしたりしています。そして、その中でいろいろな方策（ストラテジー）を使っています。どんなストラテジーを使っているのでしょうか。トップダウンモデルとボトムアップモデル、それぞれの「読み」でよく使われるストラテジーを次の表に整理してみました。

＜トップダウンモデルの読みのストラテジー＞

- 文章の内容を予測しながら読む
- 文脈から未知語の意味を推測しながら読む
- 文章に速く目を通して話の流れや大意をつかむ（スキミング）
- 文章から必要な情報だけを探しながら速く読む（スキャニング）

＜ボトムアップモデルの読みのストラテジー＞

- 重要な言葉や表現、難しい語彙や表現、文などをハイライトしながら読む
- 複雑な構造の文の意味を理解する
  （修飾関係や主述関係などを確認しながら読む）
- 文と文の接続関係や指示関係を確認しながら読む
- 文章の内容の理解を確認しながら読む
  （一文一文の理解から全体的な理解へ）

上の表にあげたものは、「読み」を効果的に進めるためのストラテジーですが、「読み」の目標を設定したり、「読み」の過程や問題点を自分で点検したり評価したり修正したりするためのストラテジー（メタ認知ストラテジー）も非常に重要です。私たちはさまざまなストラテジーを必要に応じて適切に選択し活用しながら読んでいるのです。

「読み」の授業を計画する

では、「読み」の授業をどのように計画すればいいのか考えてみましょう。授業で「読み」を教えるときにも、今まで見てきたような日常生活の「読み」に近い状況を作り出すことが必要です。そのためにはどのように授業を組み立てればいいでしょうか。

ここでは「前作業」⇒「本作業」⇒「後作業」の３つの段階に分けて授業を考えてみます。「前作業」では、学習者にこれから読む文章に対する興味や関心を持たせることと、文章を理解するのに必要な言語や社会文化に関する知識を導入することが重要です。「本作業」では、「読む」目的に合わせていろいろな「読み」のストラテジーを効果的に使って読む練習が中心になります。そして、「後作業」では、読み取った内容を生かした活動をすることと、文章中に出てきた語彙や表現、文法を利用して言語の学習をすることが重要な活動です。では、それぞれの段階で具体的にどのような活動が考えられるのでしょうか。次の表に整理してみました。

＜前作業＞

- テキストの内容に関連した絵や写真、ビデオ、レアリアなどを見せたり、テープを聞かせる
- テキストのテーマについて、学習者が持っている知識や情報、経験などを話させる
- 「読む」のに必要な情報や知識を与える
- キーワードを与えたり、内容理解に必要な概念や知識を導入する
- タイトルや見出しから内容を予測させる

＜本作業＞

- 目的を持って読む（タスク・リーディング）
  ⇒「読む」前に質問を与えておく
- 大意を取ることから細部の正確な理解へ
  ⇒いろいろな「読み」のストラテジーを組み合わせる
- 学習者が正しく理解できているかどうかを確認する
- 自分の理解が正しいかどうか、足りないことがないかどうかをモニターしながら読む

＜後作業＞

- テキストの内容についてグループやクラスでディスカッションする
- 同様のテーマについてインタビューしたりアンケートしたりする
- 感想や意見を作文に書く
- 文章中の重要な語彙や表現、文法を使って言語の学習をする

「読み」の授業で注意しなければならないこと

最後に、「読み」の授業を考えるときにどんな点に注意しなければならないか、整理しておきましょう。

まず、テキストのレベルが学習者のレベルに合っているかどうかチェックしましょう。特にトップダウンモデルの読みの練習をさせるときは、学習者にとって難しい言葉や文法が多く含まれている文章では効果的な練習はできません。難しい語彙や表現が少し含まれているようなレベルの素材を探すこと、必要に応じてテキストを学習者のレベルに合うように書き直すことが必要です。

テキストの内容が学習者の興味・関心に合っているか、学習者がどのようなスキーマを持っているかを考えることも大切なチェックポイントです。前述したように、学習者のスキーマが充分ではないと考えられる場合には、読む前に「読み」に必要な情報や知識を導入したり確認したりする作業が重要です。逆に、スキーマに頼りすぎた「読み」の弊害についても考えなければなりません。持っているスキーマが先入観や偏見になって、正しい「読み」ができないこともあります。

いろいろなタイプの文章を選択していることも大切なポイントです。「予測」や「推測」がしやすいからといって、物語や小説ばかりを読んでいては、多様なストラテジーのトレーニングができません。さまざまな内容や構造を持つ文章をバランスよく組み合わせて「読み」の練習をすることが大切です。

＜参考文献＞

岡崎眸・岡崎敏雄（2001）『日本語教育における学習の分析とデザイン―言語学習過程の視点から見た日本語教育』凡人社

国際交流基金（2006）『国際交流基金日本語教授法シリーズ７ 読むことを教える』ひつじ書房

舘岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ―日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会

J.T. ブルーアー著、松田文子・森敏昭監訳（1997）『授業が変わる―認知心理学と教育実践が手を結ぶとき』北大路書房

☆☆ 授業のヒント

今回は学習者の興味とやる気を引き出し、学習効果を高め、授業を活性化する方法や工夫を紹介します。

テーマ やる気を引き出す授業のテクニック

目的
学習者が積極的に授業に参加できるようにする
学習者のタイプ
初級～上級
クラスの人数
何人でも

◆学習者はどんな時、やる気を持つか

私たちには「新しいことを知りたい」「もっと上手にできるようになりたい」という気持ちがあります。外国語の学習は、新しいことを知ることができ、できなかったことができるようになるので、とても楽しいものです。しかし、たくさんのことを覚えなければなりませんし、難しい規則を理解しなければならなかったりします。そんなときにもやる気をなくさずに勉強できるといいですね。

学習者がやる気を持って積極的に授業や勉強に取り組むのとそうでないのとでは、やる気を持っているほうが、ずっと学習の効果が上がります。今回は、教師のちょっとした工夫で、学習者のやる気を引き出すテクニックを紹介します。明日の授業から早速取り入れてみてください。

◆ほめる・励ます

学習者は自分が話したり書いたりした日本語が正しいかどうか、不安に思うことがあります。一方で、自分で試してみたいと思って積極的に発言することもあります。そういうとき、教師がきちんと学習者にフィードバックすることが重要です。よくできたときには「いいですね」「よくできました」と言って、よくできたということを伝えましょう。積極的に取り組んでいる学習者には、「がんばっていますね」「よく勉強していますね」など、励ましのことばをかけるとよいでしょう。そうすれば、学習者は自信を持って勉強が続けられます。

◆テストをする

日本語の勉強には、漢字、単語、動詞の活用形など、覚えなければならないことがたくさんあります。教室の中で楽しく活動しながら覚えることもできますが、一人で勉強して覚えることの方が多いのではないでしょうか。きちんと覚えられたかどうかを確かめるのに、テストは有効な方法の一つです。テストの結果をほかの人と比べるのではなく、自分がどれぐらいできたかを確かめるために使うように勧めましょう。学習者が自分は何ができて、何ができていないかがわかり、自分で自分の勉強のしかたについて考えることができるようになるように指導しましょう。そのためには、テストに出す範囲をあまり大きくしないことがポイントです。

◆クラスメートの仲間意識を育てる

海外で勉強している学習者の場合、教室は日本語が使える数少ない重要な場所です。クラスの雰囲気をよくし、一緒に勉強するクラスメートとの仲間意識を育てることも、学習者のやる気につながります。クラスメートに会って話すことが楽しいと思えれば、積極的に授業に参加できます。

また、クラスメートとやりとりをすることが楽しいと思えれば、積極的に日本語を使うようになります。ペアやグループでする活動の中で、クラスメートが日本語でできるようになっていることを見たら、ちょっと努力すれば自分にもできるようになるだろうと考えることができます。クラスメートとのやりとりが、教師の説明や励ましよりもずっと効果的な場合も多いです。

◆学習者一人ひとりを大切にする

授業中に、学習者一人ひとりの声を聞いていますか。たとえば、口頭練習のとき、全員一緒にさせるだけでなく一人ずつ練習させることも取り入れましょう。学習者は、自分を表現することができた、自分のしたことが認められた、他の人の役に立つことができたと思えると、やる気を起こします。そのために、教師は授業中にできるだけ学習者に発言させるようにしましょう。

そして、ふだん発言が少なく目立たない学習者に注意

を払うことが重要です。学習項目によっては、ふだん目立たない学習者の理解が早く正確なことがあります。そういうときは、その学習者に説明をしてもらうとよいでしょう。また、絵をかくのが上手な学習者の絵を教材として使ったり、歌が上手な学習者に日本語の歌を歌ってもらったり、それぞれの学習者のよいところを授業に取り入れるようにしましょう。自分の得意なことが授業の役に立ったという経験を持てば、日本語の授業が楽しくなるでしょう。

◆学習者が興味を持つものを使う

授業で扱う内容が学習者の興味や関心に合っていたら、自然と興味がわきます。また、学習者が学びたい、あるいは必要としている日本語であれば、これもやる気がおきるでしょう。例えば、読解文に学習者の関心のあるテーマを選ぶ、学習者が必要としている会話場面の会話を練習するなどが思いつくと思います。それ以外にも、教材が目新しい、方法が新しいなども興味を引きます。写真やビデオなどの視覚に訴える教材も効果的です。このとき学習者に人気のある俳優やキャラクターを出すと、学習者の注目を集めます。ここで重要なことは、学習者の注目を学習項目や練習にうまく結びつけることです。好きな俳優のことばかりを考えて、何を練習したかわからなかったということにならないように気をつけましょう。

◆個人的なこと、本当のことを使う

例えば家族の名称（父、母、兄など）を教えるときに、教科書などに出ている、知らない人の家族を見せながら説明するよりも、教師自身の家族の写真を見せたり、家族構成の話をしたほうが、学習者は興味を持ちます。語彙や文型を導入するときに、教師や学習者自身に関わる例文をあげたり、教師の体験を話しながら導入すれば、学習者の注意を引きます。

とくに初級では、教材用に作られた日本語、教科書に出ている日本語にしか触れられないということが多いので、日本語で書かれている生教材を使うことも効果的です。

例）看板の文字を読む

◆ちょっと難しいレベルにする

内容が簡単すぎても難しすぎても、学習者はやる気を失います。少し難しくて、学習者自身が「ちょっと難しいけど、がんばってやってみよう」と思うようなレベルがちょうどいいです。１回の授業で扱う学習項目を決めたり、活動を考えたりするときには、この点に気をつけましょう。例えば、学習項目が難しくて、学習者が途中で「こんなに難しいもの、理解できるかなあ、覚えられるかなあ」と不安に思いそうな場合は、「今日はこの用法だけ覚えましょう」などと言って、中間目標を示すのもいいでしょう。

◆活動の目的、ゴールをはっきりさせる

学習者がやってみようと思うようにさせるために、何を練習しているのか、何のために練習しているかを学習者に知らせるようにしましょう。これは○○を使う練習だとか、これを練習すると△△ができるようになるということがわかると、学習者は自分の学習のプロセスや成果を確認することができます。

また、学習者に活動を指示する場合には、何をすれば活動が完成するのかをはっきりさせましょう。例えば、次のロールプレイの指示を見てください。

> 例）夏休みが終わって、久しぶりに友だちに会いました。
> 夏休みにあったことを話してください。

この例の場合、何をどのくらい話したらよいかわかりません。自分が適切に話せたかどうか確かめることも難しいです。誘いや依頼のロールプレイなら、誘いや依頼が成功したかどうかで、活動の成果が確かめられます。また、会話の流れや使われる表現もある程度決まっているので、それが使えたかどうかで満足感も得られます。

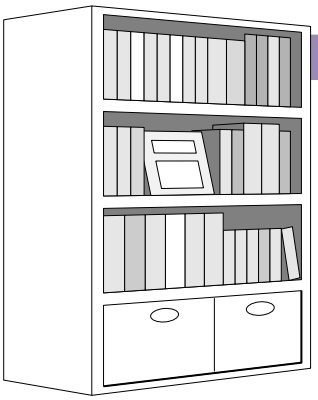
◆まとめ

学習者のやる気を引き出すテクニックをいくつか紹介しました。これらのテクニックが効果を発揮するには、教師と学習者の信頼関係が重要です。そして、教師が学習者のやる気を引き出そうとすることで、学習者からの信頼を得ることができるでしょう。一番重要なことは、教師が学習者一人ひとりに関心を持ち、どのような学習者であるかを理解しようとすることです。一人ひとりの学習者をよく観察して、どんなときにどのテクニックを使ったらよいかを考えるようにしましょう。

参考資料

市川伸一（1995）『学習と教育の心理学』岩波書店
宮川知彰・野呂正（1990）『放送大学教材 発達心理学』
（財）放送大学教育振興会

このコーナーの担当者：阿部洋子、中村雅子（日本語国際センター専任講師）
読者の皆さんからのアイディア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。



本ばこ ―新刊教材・図書紹介―

「日本語の教材や図書に関する新しい情報がほしい」という海外の先生方の声をよく聞きます。このコーナーでは、最近出版された日本語教材や参考書を中心に紹介していきます。誌面の制約上、一回に多くの本を紹介できませんが、「海外の先生にとって使いやすい教材」「授業や研究の役に立つ本」、また、「知っていると便利な図書・資料」などを取り上げます。

※データ凡例　1 著者　2 出版社　3 刊行年月　4 ISBN　5 判型・ページ数　6 定価　7 その他

歌や音楽を楽しみながら日本語を学ぶ
『日本語で歌おう！』

データ

1 吉田千寿子　2 アスク（〒162-8558 東京都新宿区下宮比町2-6）TEL.03-3267-6866 FAX. 03-3267-4471　URL. http://www.ask-digital.co.jp/　3 2006年3月　4 4-87217-600-6　5 A5判 112ページ　6 2,520円　7 CD2枚付

♪上を向いて歩こう
　涙がこぼれないように♪

この歌をご存知でしょうか。日本の有名な歌『上を向いて歩こう』です。今回はこのような日本の有名な歌や日本語学習のためにオリジナルにつくられた歌などを通じて、日本語の勉強ができる教材を紹介します。

本教材は初心者向けのもので、PART 1 と PART 2 の二つの部分で構成されています。

▽オリジナルの歌で日本語を勉強しよう

PART 1 は 1 課から16課まであります。初級で学ぶ重要な文法や文型、「数え方」「擬音語・擬態語」「動詞のて形」「動詞のない形」「自動詞・他動詞&カタカナ語」「可能形」「受身形」「やりもらい」「敬語」などを使った覚えやすい歌詞で歌が作られており、学習者は歌を楽しみながら日本語が学べるように工夫されています。

各課の構成は「発声練習」「聞きましょう」「歌いましょう」「ことば表現」「歌詞から学びましょう」「確認しましょう」「話しましょう」の順になっており、日本語学習と歌が一本化された新しいスタイルの日本語教材といえます。

PART 1 の作成には次のような配慮がなされています。

①メロディー・ラインと話すときのアクセントやイントネーションとが、できるだけ同じになるように作られており、学習者はまねして歌えば、発音もいっしょに学べます。

②リズムに乗って重要なことばをリピートしたり、ほかのことばに言い換えたりする練習ができます。

③すでに習った語彙や文型をたくさん使って作詞しているので、新しい学習テーマが無理なく学べます。

④普通にポップスを楽しむような感覚で、何度でも聴けます。

⑤場面や登場人物の気持ちなどを想像しながら、話ができます。

▽日本の有名な歌で日本を理解しよう

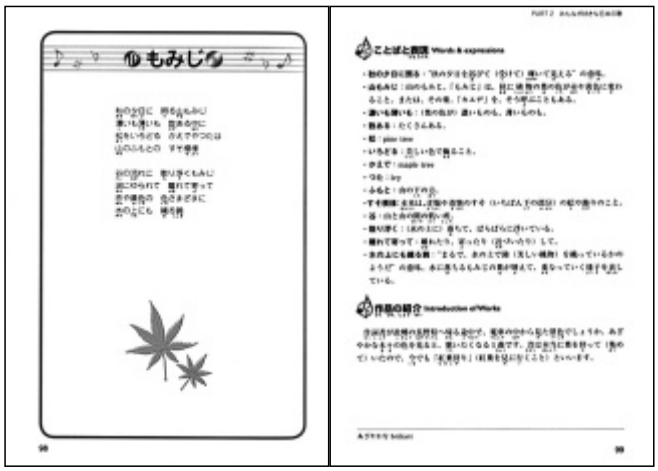
PART 2 には日本で人気があるポップス、唱歌、童謡、アニメの主題曲などから、流行したときにオリジナル曲を歌っていた歌手のもの、15曲がそのまま収録されています。

『上を向いて歩こう』『心の旅』『卒業写真』『今はもうだれも』『花』『明日があるさ』『ふるさと』『春が来た』『浜辺の歌』『もみじ』『雪』『仰げば尊し』『赤とんぼ』『手のひらを太陽に』『サザエさん』

これらの歌を通して日本語の勉強だけではなく、日本人に共通する心情を感じ取ったり、その時代の人々の様子を理解したりすることもできるでしょう。

歌詞の漢字に振り仮名がついています。また、歌詞の中に出てくる普段あまり使われていない難しいことばや表現については、解説があります。さらに、歌を作った人や作った経緯などについて、簡単な紹介もあります。

P. 4　P. 5



P. 98　P. 99

生き生きとした会話で学ぶ
『聞いて覚える話し方　日本語生中継・初中級編１』

データ

1ボイクマン総子、宮谷敦美、小室リー郁子 **2**くろしお出版（〒112-0002 東京都文京区小石川 3-16-5）TEL.03-5684-3389 FAX.03-5684-4762 URL. http://www.9640.jp **3**2006年3月 **4**4-87424-339-8 **5**B5判 152ページ **6**1,890円 **7**CD2枚、スクリプト付

この教材は、既刊の『日本語生中継　中〜上級編』の姉妹編で、初級の文法項目を学習した人（３級レベル以上）を対象に、日常生活場面での「聞く力」と「話す力」をつけることを目指しています。「初級の文法を勉強したのに使えるようにならない」「自然な日本語を話したい」などと思っている学習者が、生き生きとした自然な会話を学べるように作られています。具体的な目標としては、①人間関係に応じた表現の選択が意識できるようになる②場面に応じた表現の使い方を習得できる③トピックに関連した語彙が増える、の３点が挙げられています。

全体は、トピックと機能シラバスで構成されています。例としては、「レストラン：相手の間違いを指摘する」「買い物：人に何かを勧める／勧めを断る」「貸してもらうように頼む／貸すのを断る」「（理由を説明して）予定の変更を頼む」「マンション：苦情を言う／規則を説明する」などがあります。

各課の構成と内容は以下の通りです。

①ウォーミングアップ：語彙の確認

②聞き取り練習：人間関係、状況、内容によって異なる表現の理解

③ディクテーション：表現の正確な聞取り

④ポイントリスニング：表現意図の理解

⑤重要表現：重要表現の提示と練習

⑥もういっぱい!?：トピックに関連した語彙の拡張や重要表現の確認

⑦ロールプレイ：会話能力の養成

この教材は、クラスでも、一人で学習する場合でも使えます。本冊のほかに、ＣＤと振り仮名付きのスクリプト、英語、中国語、韓国語、ポルトガル語の訳がついた単語リストがあります。

P. 24

P. 25

P. 28

P. 29

学習者がともに学び合う、そんなクラスを作るために
『先生のためのアイディアブック　協同学習の基本原則とテクニック』

データ

1ジョージ・ジェイコブズ、マイケル・パワー、ロー・ワン・イン著、関田一彦監訳 **2**ナカニシヤ出版（〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地）TEL.075-723-0111 FAX.075-723-0095 URL.http://www.nakanishiya.co.jp/ **3**2005年11月 **4**4-7795-0023-0 **5**B5判 198ページ **6** 2,100円

「協同学習」、最近よく聞かれる言葉ですが、どんな学習なのでしょうか。この本は、「協同学習」を「生徒がさらに**効果的にいっしょに勉強するのを手助けする**ための原理と技法」と定義しています。そして、「協同学習」についていろいろな悩みを持っている先生に対して、教室で「協同学習」を進めるための基本原則と具体的なテクニックを紹介しています。

この本は、二部構成になっています。第一部では、協同学習の価値、グループ作りの原則、学習者間の互恵的な関係作り、グループ活動における個人の責任、学習者間の相互作用の大切さ、協同学習における学習者と教師の役割、グループの自律性を育てるための方法、協同学習の評価など、「協同学習」を行うに当たって大切になる原則について、具体的な活動を参照しながらわかりやすく説明しています。

第二部では、「協同学習」を実践する上でのさまざまな質問・疑問をとりあげ、丁寧に解説しています。例えば、グループ活動では学ぶことができないと思っている生徒をどのように励ませばいいか、課題やグループ活動をちゃんとしないグループにどう対処すればいいか、大人数のクラスでどのように協同学習を使えるか、他のメンバーとうまくいかない生徒にどう対応すればいいかというような「協同学習」をどう準備し運営・実践していくかについて、多くの教師が感じている疑問に丁寧に答えています。また、同僚や上司の理解と協力を得るためにはどうすればいいかというような質問をとり上げていることも、この本のユニークな魅力の一つです。

幼稚園から大学、成人教育にいたるすべてのレベルの教師、すべての教科の教師に有用な示唆を与える本だと言えるでしょう。

第１部トビラ

順を追って書く力を育てる
『大学で学ぶための日本語ライティング　短文からレポート作成まで』

データ

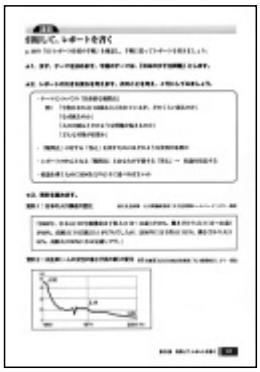
1佐々木瑞枝、細井和代、藤尾喜代子　**2**ジャパンタイムズ（〒108-0023 東京都港区芝浦4-5-4）TEL.03-3453-2013 FAX.03-3453-8023 URL. http://bookclub.japantimes.co.jp/　**3**2006年3月　**4**4-7890-1221-2　**5**B5判 96ページ　**6**1,890円

中級以上になると、論理的な文章を書けるようになりたいと考える学習者が多くなるでしょう。この教材は、レポートなど、構成がしっかりとした、まとまった長さの文章を書くことがまだ難しい学習者のためのものです。この本の構成は、次のようになっています。レベル１：短文や段落を作る練習をします。アンケートや説明・意見の文章を取り上げています。レベル２：文章を作る練習をします。報告、意見、自己紹介などの文章を取り上げています。レベル３：レポートを書く練習をします。資料の分析と引用のための表現をとりあげています。このように、短文の練習から始まって、資料の分析や引用をしたレポートを書く練習にまでつながっています。各レベルとも、短い文・文章の中で表現を使ってみる練習と、具体的に文章を書いてみる実践課題からなっています。レベル１とレベル２には、実際場面への応用になる課題も加わっています。例えば、テーマを決めて実際にアンケートを作ったり、体験したことについて報告したりする課題です。

この本の特徴は、学習者が実際にテキストに書き込むスペースがたくさんあるということです。練習問題は、絵や資料を見て文章を完成させるタイプのものが多く、一人で書くことが難しい学習者にも取り組みやすくなっています。また、各章の最後にある課題も、表や構成案を埋めていけば、目標とする文章や、その骨組みが書き上げられるようになっています。

「学習者にどのような枠組みや資料を提供すれば文章を書く練習がしやすくなるか」という目でこの教材を観察すると、文章作成のための授業を組み立てるヒントも得られるでしょう。

P.64


P.67

P.70

P.71

自分の教え方をふり返り、「読む」活動の目的や具体的な練習方法を考える
『国際交流基金　日本語教授法シリーズ７　読むことを教える』

データ

1国際交流基金　**2**ひつじ書房（〒112-0002 東京都文京区小石川5-21-5）TEL. 03-5684-6871 FAX. 03-5684-6872 URL. http://www.hituzi.co.jp/　**3**2006年6月　**4**4-89476-307-9　**5**B5判 82ページ　**6**735円

この本は、『国際交流基金日本語教授法シリーズ』全14巻のうちの1冊で、読むことの教え方について書かれたものです。

このシリーズは、国際交流基金日本語国際センターで行われている海外日本語教師研修を担当している講師陣が実際の研修の経験をもとに執筆しました。教授法に関する必要な知識を得るだけでなく、自分自身の教え方をふり返り、新しい知識がどう活かせるか自分で考えることを目的としています。

この本は現在日本語教師をしている方を主な対象としていますが、教師経験のまだ浅い方や、日本語教授法の勉強を全くしたことのない方にも理解していただける内容になっています。またノンネイティブの日本語教師にも配慮し、原則として日本語能力試験２級以上のレベルの漢字に振り仮名が付けられ、平易な文章で書かれています。

この本の構成は、まず「読むこと」とは何か、そのメカニズムについて自らの体験をふり返りながら考えるところから始まります。次に「読む力」をつけるための活動を、市販の読解教材の具体的な活動やタスクを分析しながら考えます。さらに「読み」を中心とした授業の計画を考えます。日常の「読み」と同じような状況を作るにはどうすれば良いのか、初級の「読み」、中級の「読み」の活動はどう考えればよいのか、そしてほかの技能と合わせた「読み」の活動にはどのようなものがあるのか、質問に答えたり、課題を解決したりしながら、自らの力で発見し、考えられるようになっています。

独習用にも利用できますが、現職の教師同士の勉強会、教授法の授業などで、仲間と話し合いながら使うことで、より効果的な利用ができます。

P.12

P.13

P.28

P,29

P.11 ～ 13 は国際交流基金の以下の日本語専任講師が図書を選び、分担して紹介文を執筆しました。
王　崇梁、向井園子、木谷直之、長坂水晶、久保田美子（執筆順）

文法を楽しく!!

「～て～」(1)

通信で習った項目：「は」と「が」、他動詞･自動詞、受身、やりもらい、～てきた、～ていく、～ている、～てある、～ために、～ように、～たら、～と、～て

Grammar studied in the past

今回と次回は「～て」が次の文にかかっていく「～て～」の形を考えます。

「て」によって２文（２文以上の場合もある）が接続するとき、次のような形をとります。

て、	
前文（Sentence １）	後文（Sentence ２）

「Ｓ１て、Ｓ２」では、Ｓ１とＳ２の時間的関係や、そこに使われる動詞・形容詞などの種類で、次のⅠ～Ⅳのように意味用法が変わってきます。

Ⅰ．動作が続いて起こることを表す「～て～」（継起）

(1) 図書館に行って、本を借りてこよう。
(2) きのうはうちに帰って、すぐシャワーを浴びた。

これらの文では、Ｓ１が終わって、引き続いてＳ２が起こることを表しています。

Ｓ１とＳ２の間には時間的な前後関係があります。またＳ１とＳ２の主語（動作をする人・もの）は同じです。

Ⅱ．その動作がどのような状態で行われているかを表す「～て～」（付帯状況）

(3) めがねをかけて運転する。
(4) テープを聞いて勉強します。

これらの文では、Ｓ１が状態・手段を表し、Ｓ１の状態・手段のもとでＳ２が行われていることを表します。(3) ではめがねをかけた状態で運転をし、(4) ではテープを聞くという手段で勉強することを表します。

Ｓ１とＳ２の間には時間的な前後関係はありません。Ｓ１とＳ２の主語は同じです。

Ⅲ．理由を表す「～て～」（動詞・形容詞・「名詞＋だ」）

(5) 借金取りが来て困っている。
(6) ゆうべは寒くて寝られなかった。
(7) 土砂崩れで新幹線が止まってしまった。

「～て」が理由を表す場合は、Ｓ１かＳ２のどちらか、または両方が、状態や無意志の動作を表す場合です。(5) の「困っている」、(6) では、「寒い」と「寝られなかった」、(7) の「止まる」が状態や無意志の動作を表しています。

理由を表す「～て～」では時間の前後関係はそれほど重要ではありません。また、Ｓ１とＳ２では主語は同じ場合も違う場合もあります。

Ⅳ．並列を表す「～て～」

(8) 彼は医者で、お金も持っている。
(9) 彼女はスキーができて、馬にも乗れる。

(8) は「彼」について、(9) は「彼女」について複数のことが並べて説明されています（複数のことを並べて説明することを「並列」と呼びます）。Ｓ１とＳ２の主語が同じで、状態動詞、形容詞、「名詞＋だ」で結ばれているときは並列になりやすくなります。

以上、Ⅰ～Ⅳで「～て～」の主な用法について説明しました。たぶん皆さんは「～て～」の形はやさしいと思っているのではありませんか。次の「**?**」の付いた文は外国人学習者が作ったものです。どこかおかしいところがあるのですが、考えてみてください。

問題

1．A：　きのう何をしましたか。
　　B：?きのうは起きて、洗濯をして、手紙を書いて、ご飯を食べて、テレビを見ました。
2．?めがねをかけながら運転する。
3．?寒くてヒーターをつけよう。
4．?このりんごはおいしくて、赤くて、大きいです。

１は動作が続いて起こることを表す「～て」の使い方

ですね。2はどうでしょう。3は理由を、4は並列を表す「～て」の用法です。正解は次のようです。

1’ A：きのう何をしましたか。
　B：きのうは朝洗濯をして、手紙を書きました。そして、昼ご飯を食べてから、テレビを見ました。
2’ めがねをかけて運転する。
3’ 寒いから、ヒーターをつけよう。
4’ このりんごは赤くて、大きくて、おいしいです。

では、次に、これらの誤用を踏まえて、「～て～」の主な用法について注意すべき点を取り上げます。

Ⅰ．動作が続いて起こることを表す「～て」（継起）

注意1「～て、～て、～て…」と長く続けないこと。

「きのう何をしたか」と質問されると、したことをいろいろ言いたくなりますね。しかし、「～て」でつなぐときは、学習者の文1Bのように「～て、～て、～て…」と長くつなぐことは実際にはありません。正解文のように、せいぜい一つの動作か二つの動作が「て」でつながれます。

注意2 同じグループの動作を並べること。

1Bでは「洗濯する」「手紙を書く」「テレビを見る」と同列に、「起きる」「ご飯を食べる」を並べています。初めの三つの動作は、Bさんが人に話すに値する動作ですが、「起きる」「ご飯を食べる」は誰でも日常行う動作なので、「洗濯する」「手紙を書く」などと並べるとおかしくなります。「～て」で動作をつなぐときは、同じようなレベルの動作どうしをつなぐようにしてください。

「～て」でつなぐ代わりに、「～たり～たり」でつなぐ方法もあります。「～たり～たり」でつなぐと1Bは次のようになります。

(10) きのうは洗濯をしたり、手紙を書いたりしました。

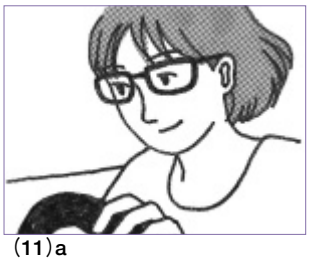
Ⅱ．その動作がどのような状況・状態で行われているかを表す「～て」（付帯状況）

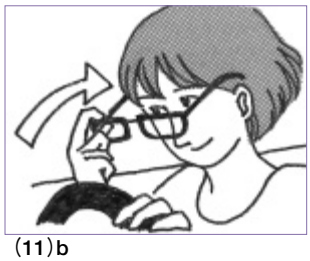
注意3「～て」と「～ながら」を混同しないこと。

ここで説明しようとしている「～て」は、同時動作を表す「～ながら」と混同しがちです。「～ながら」は二つの動作を同時にすることを表し、「～て」は一つの動作をするときにどういう状態・手段でするかを表します。次のaとbは同じではありません。

(11) a．めがねをかけて運転する。
　　b．めがねをかけながら運転する。

(11) aはめがねをかけた状態で運転することを、(11) bは今まさにめがねをかける動作をしながら、運転をしていることを表します。したがって、この場合は、bの文は不自然になります。


(11)a


(11)b

Ⅲ．理由を表す「～て」

注意4 理由を表したい場合は、S2に意志や願望・義務を表す表現（例：行こう［意志］、行け［命令］、行ってください［依頼］、行きたい［願望］、行かなければならない［義務］、など）**を使わないこと。**

(12)　寒くてヒーターをつけた。
(13) ？寒くてヒーターをつけてもいいですか。
(14) ？寒くてヒーターをつけたい。
(15) ？寒くてヒーターをつけてください。

(12) は単なる事実を表しているので、理由を表す文としても適切です。一方、(13) ～ (15) はS2に「～てもいい（許可）」「～たい（願望）」「～てください（依頼）」などの意志表現が来ていて、不自然な文となっています。このような場合は、次のように理由を表す「～ので」や「～から」を使う必要があります。

(13)’ 寒いので、ヒーターをつけてもいいですか。
(14)’ 寒いから、ヒーターをつけたい。
(15)’ 寒いから、ヒーターをつけてください。

Ⅳ．並列を表す「～て」

注意5 ものや人について述べるときは、判断・評価を表す語を一番最後に持ってくること。

「このりんごはおいしくて赤くて大きいです。」では、「赤い」「大きい」はりんごの色や形を表していますが、「おいしい」は味についての話し手の判断・評価（「いい・悪い」などの気持ち）を表します。この文では「おいしい」の、文の中での位置がよくないようです。正解文4’のように、「おいしい」を一番最後に持って来ましょう。

このように、いくつかの形容詞を並べる場合は、色や形などの外観を表すものを先に、最後に「おいしい・いい・おもしろい・楽しい・よくない」などの判断・評価を持って来れば文が適切になります。

参考文献

市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社
市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

このコーナーの担当者：市川保子（日本語国際センター客員講師）このコーナーについてご感想やご質問があれば送ってください。「ヤスコの日本語ハウス」という個人のホームページを開いています。英語の翻訳も付いていますので、ぜひ活用してください。ホームページのアドレスは、http://homepage3.nifty.com/i-yasu/index.htm です。

KC研修生の（関西国際センター）Nipponリポート

このコーナーでは、関西国際センターの日本語研修に参加している研修生が研修を通して発見した **Nippon** についてリポートします。

第6回 公共図書館のサービス

「司書日本語研修」に参加している仲さんは、中国の公共図書館で司書（librarian）をしています。日本の公共図書館のサービスについて知りたかったので、大阪市立中央図書館に行ってみました。

◀移動図書館の前で大阪市立中央図書館の小林さんといっしょに

中国の図書館と同じようなサービスもありました。

【レファレンス】

資料を探すのを手伝ったり、役に立つ本を紹介したりします。

【移動図書館】

図書館から離れた地域に移動図書館が行きます。主婦やお年寄りがたくさん来るそうです。

中国の図書館にはないサービスもありました。

「おはなし会」では何をしますか？

図書館にある「おはなしの部屋」で子ども達に本を読んであげます。

中国と日本の図書館では、子どものためのサービスがちがいます。小さい時から本を読んであげることはとてもいいことだと思いました。

「ブックスタート」って何ですか？

赤ちゃんとお母さんの集まる場所に行って、本の大切さを教えます。

日本の図書館は本を貸すだけでなく、いろいろなサービスをしていました。子どもからお年寄りまで誰でも利用できるように工夫をしています。中国に帰ったらみんなに教えたいと思います。

▽日本の図書館についてもっと知りたい人は下のURLを見てください。

大阪市立図書館（日本語/英語/中国語/韓国語）http://www.oml.city.osaka.jp
国立国会図書館（日本語/英語）http://www.ndl.go.jp/
遠賀町立図書館（日本語のみ）http://www.library.onga.fukuoka.jp　＊「図書館の仕事」をクリック

このコーナーの担当者：和泉元千春、品川直美（関西国際センター日本語教育専門員）、リポーター：仲維華（中国）